

現代における他者性と共生

——イエスの譬え「善きサマリア人」の解釈を通して——

宮本 久雄

よろしくお願いいたします、宮本です。今日は基本的にはナラティブや物語論というものを背景にして、「イエスの譬え話」を皆さんと分かち合ってみたいと思います。この譬え話に関しては、新約聖書でイエスは多彩な譬え話を述べております。今、皆さんのお手元に既に三つぐらいの譬え話を資料としてお届けしたんですが、今日は善きサマリア人の譬え話に絞って、これをゆっくり解釈していきたいと思えます。

学ジャンルなわけです。譬え話は、抽象的論理でなく一般の生活の普通の題材をテーマに取って話しますし、それは聞く人読む人が、自分の今置かれている場において、自分なりに解釈してその譬え話から自分の未来、自分のあり方に対するメッセージを汲み取っていく。ですから、譬え話というボールを投げかけられて、何らかのかたちでそのボールを変化球にして投げ返すという、その全部が譬え話という文学ジャンルが持っている、非常にダイナミックな力なんです。そういう譬え話が聖書に出てくるのですが、それはある文脈、あるコンテキストの中で出てきますので、その譬え話と

関係のある文脈も含めて、皆さんのお手元に善きサマリア人という、3と書いてありますが、この資料を届けて頂いたわけです。譬え話を理解するには、大雑把に、私としては二つのポイント、必要な方法を提示します。一点目は、別の大きな紙に書いてあるように、全体のストラクチャー理解です。こういう譬え話も含め聖書の物語は最初から書きとめられたのではなく、オーラルトラディション、口でリズムミカルに伝えられていった。ですから、必ずリズムを持っているのです。そのリズムが文章化され、書き下ろされたときに、ある構造、ち

よつと見ただけじゃ分かりませんけれども、ある構造となつて定着するわけです。ですから、譬え話を読むときにはその構造に注意する。

二点目は、そのストーリーに探偵小説みたいな面があつて、色んな逆説だとか誇張法だとか、どんでん返し、重複句、常識に反するような箇所、つまりなにかそこから活火山を示すマグマが噴き出しているような、テキストの真相を示すなにか異質なものが読み取れます。それは「異化作用」という風と呼ばれているわけです。つまりテキストが自分自身を異化していく。そしてそれに目をつけることによつて読者がまた、或いは聞き手がテキストに隠された自らが解釈するメッセージと出会う。ですから第二のポイントは、異化作用に気を付けるということです。

ところがどんでん返しだとか、色んな誇張法だとか、常識にかなわないような表現といつても、聖書というのは、紀元一世紀ぐらいにギリシャ語で書かれました。コイナーといつて、古典ギリシャ語とはまた違ったギリシャ語で書かれている。しかも書

いた人たちが主にユダヤ人で、ちょっとセム的な響きを含んでいることがあります。

その時代は、ローマ帝国がイスラエルを支配していた頃です。聖書の民は遊牧民族で、歴史、言語、習慣だとかですね、現代二十世紀の東アジアに住む農耕民的な私たちがとうんと違うので、色んな点で私たちは彼らのことは知らないわけですから、異化作用も見つけにくいところもあります。一方で譬えを物語として受け取る時は、異化作用が持っている伝統だとか、民族性だとか文化の違いとか、色んなことが分からなくても自分なりのメッセージは読み取れるのですが、他方で特に譬えのテキストは解りにくいことを含んでいるので、今日は私がある程度、当時の風俗、考え方を、皆さんに提供しながら異化作用に目をつけてみたいと思います。

まず、さーっとテキストを読みますと、まずどういう文脈で語られるのが問われます。この譬えを含む文脈はルカという福音書の（ルカっていうのはお医者さんみたくて）、10章の25節から、37節までです。この章だとか何節とかは後の時代に付け加

えられたので、元のギリシャ語はベタで書かれています。いずれにせよ、このイエスとある律法の専門家の対話が展開するわけですが、周りにはいろいろな人々、ユダヤ人が興味津々としてイエスの言葉を聞こうとして集まっている、そういう状況です。

それで、ある律法の専門家が立ち上がつてイエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」。イエスは「律法には何て書いてあるか、またそれをどう読んでいますか」と言われると、彼は答えた。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさいとあります」。イエスは言われた。「正しい答えだ、それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」と。

ここでもう解釈上既に律法の専門家って何かという大きな問題が起こってきます。その説明をしてみましょう。資料には、イエス時代のイスラエルの地図と左に三角形の絵が描いてあるのですけれども、当時のイスラエルはローマ帝国の全体主義に支配

されていて、ローマ帝国は総督を派遣いたします。で、その総督は、当時はポンシオ・ピラトという有名な人で、彼の下でユダヤ人は支配されているのですが、その支配に抗しユダヤ人は自分たちの民族的歴史、宗教、伝統をもち独特なユダヤ教世界を作っていたわけです。三角形の図を御覧ください。その中心が最高法院というところで大祭司が中心となって議長を務め、その下にサドカイ派という貴族層と、それからファリサイ派とが支配層を成しています。ファリサイ派とは、ユダヤ教の律法、トーラーと申しますが、それを解釈したり、或いは守っていない人を裁いたり、断罪したりする人々を言います。だからファリサイ派は、律法の専門家と呼ばれていません。

この三角形の内側が神に選ばれたユダヤ教の人々の聖なる世界なわけです。その外側に聖なる人々から排斥された人々、つまり律法を守っていないので罪を犯したと断罪された人々や異邦人がいます。異邦人にはギリシヤ人とかローマ人とか日本人も全部、ユダヤ人以外はほぼみんな入っちゃ

う。罪を犯した汚れた人たちは、徴税人とか遊女、障害のある人です。ハンセン病とか貧しくて税金も払えない地の民もそうです。三角形はこういう構造を示しているわけです。では律法・掟というのは何かと申しますと、その内容はミシュナーという律法の集大成の一卷から六巻に書いてあります。まず一卷は種子の巻といって農業と農産物の暦とか犠牲、そんなものが書いてある。二巻目は、季節の巻で安息日、祝日、断食についての掟。三巻目は婦人の巻で、結婚、離婚、夫婦関係について命じている。第四巻は損害の巻。民法や刑法の手續きについての命令。第五巻は聖物の巻、神殿、祭司の章。第六巻は祭儀的な浄不浄に関するものですね。例えば、食べるときは手を洗うだとか、しょつちゅう禊をやつて体を清めるといふのは、そういう規定が書いてあるからです。これを見ますと要するに私たち現代日本人にとつては、ゆりかごから墓場までの生を規定する法律も含めて全部が、ユダヤ教では神から与えられた法として、宗教的な色彩を持っている。だからこれを全部守るといふことが、この三

角形のユダヤ教の信徒、あるいは市民として認定される条件なのです。その認定を左右しているのが律法学者である、というわけです。

律法の専門家は、ちっちゃい時から律法を勉強して全部暗記しております。その彼が質問するわけですね、イエスに、永遠の生命について。イエスは、律法にんんと書いてあるかと逆に質問いたします。彼はただイエスを試そうとしていったわけですから、答えを知っているんです。だからさらさらと、「全身全霊で神を愛し、また隣人を自分のように愛しなさい」と答えた。で、イエスは言われた。「うまく答えたね。実践しなさい」と。

この場面を構造的に見ますと、律法がテーマになつてくる。これが、この譬え話が出てくるコンテキストの、第一シーンである。29節にはまたこの律法の専門家が、今度は自分を正当化しようとしてまた別な質問をイエスにします。今度は隣人とは誰かという質問です。この質問が、第一シーンの質問と重複句となつて、第二シーンのスタート点になつてくる。この文脈で、イエ

スが善きサマリア人の譬え話を語るわけですね。イエスは譬え話を語り終えて、この36節で、この律法の専門家に逆に質問いたします。それに専門家は答える。そこでイエスと言うわけです。「行ってあなたも同じようにしなさい」。以上を構造的に見ますと、第一のシーンは律法学者の質問、第二のシーンも律法学者の質問で始まっております。第一のシーンのおしまいはイエスが実行しなさいと勧めるわけですね。第二のシーンも実行しなさいで終わります。だからなんとなく、この二つの構造が、浮かんでくるわけです。さらに細かく見ていきましょう。

第一のシーンでイエスとその律法学者に共通な、会話の土俵って言うのはトローラ、律法です。二人にとって、あるいは周りにいる人たちにとって律法というのは大体どんなものか見当がつくので、これは話の土俵になっているわけです。ところが第二シーンで、私の隣人とは誰ですかという問いに対して、イエスが譬え話を語る。この譬え話は律法学者とイエスの対話の土俵になります。共通の土俵になります。とこ

ろが譬え話ですから長いわけですが、いずれにせよ両シーンで両者に共通の言語空間っていうのは、律法と譬えです。それが語られたときイエスが問う。で、律法学者が答える。で、イエスがやりなさい、と。そういうことです。こういう風に第一シーンと第二シーンが見事に対応する形になります。こう、両側の扉が閉じてびたりと対称になるような、そういう構造になっているわけです。

さて、譬え話は、ある人がエルサレムからエリコに下っていく途中追いはぎに襲われた話から始まります。多分、彼は信心深いユダヤ人でエルサレムの神殿に詣でて、帰る途中だったのでしょう。エルサレムには私も一年ぐらい住んだんですけど、標高八〇〇メートル、九〇〇メートルの山上の高いところで冬になると雪が降るんですね。エリコというのは、おそらく世界で一番低い海面下二〇〇メートルぐらいの都市です。冬は結構暖かいところです。ですからエルサレムからエリコに降っていくと、タクシーなんかでぱーっと降っていくと、飛行機なんかで急降下するときと同じよう

に耳が詰まるような印象を受けます。その途中に色々な岩山があったりV字谷があったりして、そこら辺の洞窟に盗賊が住んでいる。箱根の山の追いはぎみたいな感じで住んでいるわけで、イエスはこの譬えを取り上げたのですから、このエルサレムからエリコに下っていく途中、時々追いはぎに遭うということは当時の人にとっては珍しいことではなかったのです。追いはぎはその人の服を剥ぎ取り殴りつけて半殺しにしたまま立ち去った。

私なんか追いはぎに襲われ、身ぐるみ脱いで置いてけって言われると、ガタガタふるえて、そこにカバンを置いて、背広もズボンも取って、財布を出して時計もはずして、みんなあげます。どうか許してくださいと言ってしまう。「うん、お前は殊勝なやつだ。許して遣わすぞ。」盗賊はそう言って全部持って立ち去る。私は何とか無事に生きることはできるわけです。ところがこの譬えでは、その人の服を剥ぎ取り、殴りつけて半殺しにしたまま立ち去ったと描かれている。非常に短い表現ですけど、やっぱりこの人はかなり抵抗したってこと

が想像できます。追いはぎは服を盗ろうとした。で、彼は、盗られない・盗らせない。すると、もう追いはぎはカッカカッカして頭を殴りつけたり足腰をけつたりして、服を盗ってもう半殺しにした(30節)。

だからこの人はだいぶ骨のあるユダヤ教徒なのでしよう。譬え話は文学ですから色んな想像をしてもいいわけで、解釈は決まっていなわけです。

さて次の31節と32節をご覧になると表現が非常に似ております(重複句)。ある祭司はたまたまその道を下ってきたが、その人を見ると、道の向こう側を通っていた。同じようにレビ人もその場所にやってきました。その人を見ると道の向こう側を通っていた。厭味ですよ。皆さんのどなたかがその、校門を出たところで、バン、と自動車事故に遭った。竹内先生が出てきた。事故に遭った方が、今じゃあ救急車を呼んでくれると思っていたら、先生は道の向こう側を通って行っちゃった。ということになると、がっかりしますよね。次に、服部先生がいらっしやって、道の向こう側を通って行っちゃった。救急車も呼ばな

い。がっかりする。これは異化作用と考えるとよろしいです。こういうのは、ダブルレット、重複句っていうですね。聖書ではよく使われます。

ところがここで、話のどんでん返し。旅をしているあるサマリア人が半殺しにされた人の傍に来て介抱するという大異化作用のどんでん返し。皆さんちよつと、地図を見て欲しいのですが、当時のローマ帝国の支配下にあったイスラエルは、ユダヤ、サマリア、ガリラヤの三地方に分かれていたのです。ユダヤ地方というのが一番ユダヤ教が強くて、首都エルサレムには神殿があつて、ユダヤ教の中心です。エルサレム近くにベツレヘムという町があつて、ここでイエスが誕生しました。クリスマスのときに教会によくイエス誕生の時を表わす銅い葉桶、東方の三博士の像、天使など飾りがあるのですけど、ここで誕生した。右の方角には有名な死海があります。人間が入っても沈まないほど塩分とか色んな物質の濃度が濃い湖です。で、その死海をずーっとヨルダン川を経て北上すると、ガリラヤ湖に達する。実はガリラヤ湖から水がヨルダ

ン川を通じて死海に注ぎ入っているわけですが、ガリラヤ湖がある方、ガリラヤ地方っていうのがあつて、そこでイエスは育ったわけです。大工の子として。

ガリラヤとユダヤの間にサマリア地方というのがありまして、首都サマリアの近くにゲリジム山があつて、その神殿を中心にして、サマリア教がサマリア人の団結の中心だった。ユダヤ教と非常に似ております。彼らもメシアを待ち焦がれているわけですね。NHKの教育テレビでサマリア教について放映されましたが、今も少数数の信徒集団が残っているようです。このサマリア教がユダヤ教と敵対関係にありました。ユダヤ人が神殿を作ろうとするとすぐに邪魔をしたり、或いはサマリアはヘレニズム化されたので色んな神像がつくられていたわけですが、ユダヤ人が侵入して全部壊しちゃった。ヘレニズムの神像を偶像とか何とか言つて。ですから両者は非常に剣呑な関係で、交流はありません。敵対関係にあります。だからユダヤ人がガリラヤに行くときはサマリアを通らずヨルダン川にずっと沿っていくか、地中海の沿岸を通つ

ていくわけです。さてイエスの譬えを聞いている人たちは、レビ人とか祭司が本来ならば同胞であるユダヤ人を救わなきゃならないと思うわけです。ところがイエスは彼らが救われないで、旅をしていたサマリア人を救助者として登場させた。聞いていた人たちはサマリア人だから半殺しになったユダヤ人を蹴っ放って、きつと殺すのじゃないかぐらいに思ったかもしれないのですが、逆に、傍に来てその人を見て憐れに思っただけで、傷口を洗い包帯をし、ロバに乗せて介抱した。ファン・ゴッホの描いた「善きサマリア人」の油絵があります。サマリア人が傷ついた人をロバに乗っけようとしている図です。ちょっと分かりにくいのですが、左のほうをご覧になると、二人の人の背中が見えます。遠くにいる人は祭司です。馬の尻尾の辺りにいる人がレビ人でしょうね。さてサマリア人は憐れに思ったという。憐れってという言葉は、ヘブライ語でラハミームって言って、お母さんの母胎を意味します。母胎に由来する言葉で、赤ちゃんを無償に愛することです。だから憐れみとは、倫理的に正しい規範だから守る

とか義務だからとかそういう判断なんかを飛び越してパーツとこの傷ついた人にほとばしる愛なのです。このサマリア人は、一晩介抱して翌日デナリオン銀貨二枚を取り出して、宿屋の主人に渡して言ったわけです。デナリオン銀貨って言うのは、ローマ貨幣です。イスラエルは小さな支配されている国ですから、ギリシャ貨幣とかローマ貨幣を国の貨幣として用いていた。それで一日分の給料が一デナリオンですからデナリオンは二日分ですね、それを宿屋の主人に渡して言った。「費用がもつとかかかったら、帰りがけに払います」と。これはどういうことかという、傷ついた人はその宿屋の部屋を占領する。普段ならお客さんを泊めて宿屋はそれで儲けるわけですよ。部屋を占領すると、そういう事ができない。治療費もかかる。で、もしこの人が治ったときはかなりお金がかかっているはずで、そうしますと、当然この人は払えない。すると宿屋の主人は場合によってはこの人を奴隷に売っちゃうのです。奴隷に売って、その埋め合わせをする。だからそれを分かっていたサマリア人

は、帰りがけに支払いますと言う。ですから、彼の憐れみというのは一時的な感情じゃなくて持続的なのです。お母さんも子供が可愛いんです。だから産みっ放しってわけじゃなく、一生懸命育てていく。母は父親と共に、言葉を教え、だんだん育てていって、子供はちゃんとした人間になる。憐れみにはその母親の持続的育みの心があります。これまでが譬え話。これを語ってイエスは譬え話を律法の専門家にボールのように投げかけて、「じゃああなたはどう思う。誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」と問うわけですね。律法の専門家は「その人を助けた人」と答えた。イエスは第一シーンと同様に、「行ってあなたも同じようにしなさい」ということになりました。ですから、譬えの中でサマリア人が半殺しにされたユダヤ人を援ける箇所は、異化作用で、そこにイエスの狙いが透けて見えます。

他方で同胞を本当に愛さなきゃならないというのは旧約聖書の倫理の根幹を成すわけです。ところがイエスの時代では、ローマ帝国が支配していたのでユダヤ教のナシ

ヨナリズムが非常に強くなっておりまして、隣人というともうユダヤ人、あるいはユダヤ教に改宗した外人、それ以外は隣人として認めないというような排他的な精神が強かった。ですからこの律法の専門家の二番目の質問、「私の隣人とは誰ですか」という質問は、律法家としてもう答えは分かっているわけです。ユダヤ人だけだと。

例えば私の隣人っていうのは、律法学者的にいうと、前から一列、この左右お二人ぐらい。一番向こうの列の方は異邦人で、真ん中におられる方はグレイゾーンの隣人、みたいな感じになるわけです。このように隣人というのは誰かという律法的な問いは定義を求める。何々は何々であるという定義を求める質問です。ところが、イエスが譬え話を語って最後に律法の専門家に、「誰が隣人になったのか」と問う。その際に注目すべきは「隣人になる」という表現です。それはどういうことでしょうか。隣人になるという意味では、私は一番後ろの方のところに行って一緒にケーキを食べて、コーヒーぐらい飲んで色んなお話を

をして隣人になる。だから隣人になっていくという、これがイエスの強調点です。だからこのサマリア人は、そういう意味で、色々な宗教だとか、民族だとか、敵対の歴史だとか、そういうものの差別を超えて、垣根を越えて、半殺しのユダヤ人にただ隣れみによって、介抱して隣人になっていく。隣人というのは無限に隣人になっていく。なっていくという。そのなるということ。である、という定義や固定化を超えた、ヴェルデン (werden) っていうか、何々になるっていう、そういう他者に向けての脱我がこの背景に読み取れるのです。

もう一つは、これは話の他の半分で、この半殺しにされたユダヤ人が敬虔なユダヤ教徒であれば、自分がどんな命の危険があっても、サマリア人から介抱は受けたくないというのが当時の宗教的な常識だったわけですから。ユダヤ人がサマリア人から介抱を受けるとユダヤ人のメシア (救世主) が来るのが遅れてしまう、と考えられていた。そして穢れてしまう。つまりこの三角形の聖なる選民の外に追い出されるということになります。この祭司やレビ人が、この半殺し

になった人を避けた理由は、「レビ記」22章で、聖職者が穢れるっていうことはどんなことかって色々書いてあるわけですが、要するに死体に触れたものとか、重い皮膚病のあるもの、いかなる穢れにせよ穢れている人に触れたものはみな穢れた者になる。こういう風に、倒れて血まみれで死んだような人、これに触れると穢れる。だからこの祭司とレビ人は、自分が穢れて聖なる選民から除外されるのを嫌って同胞愛を犠牲にして、穢れないように道の向こう側を通っていったのです。ところがこのサマリア人は、そういうこととは関係がない。そして彼はユダヤ人にとって敵対者ですから、この半殺しになった人は正統ユダヤ教徒である限り、サマリア人に触れられるっていうのは穢れちゃうので、決してその介抱を受け容れないはず。しかしどうして介抱を受け容れたのか。その説明がむづかしい。これは、エホバの証人でしたっけ、アメリカのキリスト教の一派ですが、徴兵制を拒否したり、それから血を、ビフテキを食べるのも血が含まれておりますから拒否するとか、輸血も拒否したんです。

昔、聖マリアンナ大学でその宗派の息子が自動車事故で出血して、死にそうになったとき、両親が来て、輸血をするっていったら、「いやいや、うちの宗旨では輸血は禁じられているんで駄目です」と輸血拒否して、息子はとうとう死んじゃったんですよ。あるいは別な例。日本では第二次大戦中に陸軍大臣・大将東条英機が戦陣訓を作って、要するに敵の捕虜になっちゃならないっていう風に兵隊たちに毎日暗誦させていた。だから例えば捕虜になった日本兵が、捕虜交換で帰ってくれば、軍事法廷で銃殺刑になる。アメリカ人が捕虜になって交換で帰れば、家族・友人は「おお」とか言ってみんな抱きついて、「Welcome!」とかなんとか言うのでしょうか。他方で日本軍の兵隊は自殺する。捕虜にならないように。追い詰められて捕えられそうなきに万歳突撃をして死ぬ。だから自殺の動機の中にはこの戦陣訓はかなり効いている面がある。このように命よりもその時代の政治や軍隊のイデオロギーとか、宗教的な掟、これを大切にします。今の北朝鮮もそうかもしれません。將軍様のためにはもう命を投

げ出すとか。ですからこのユダヤ人は半殺しで瀕死でも、サマリア人の介抱は、受け取らないはずなのです。メシアが来るのが遅れたり、自分も穢れちゃう。しかし彼が、なぜこのサマリア人の介抱を受け取ったかっていうのが、もうひとつのこの話の半分です。

どこに手がかりがあるのかとテキストを読みますと、異化作用の重複句（31―32節）が目につく。重複句は、祭司もレビ人もユダヤ教のシンボルですが、そうしたユダヤ教のシンボルから、この人は捨てられたっていうことを際立たせている。さっきも言いましたけれども、皆さまのどなたかが自動車事故に遭うとする。普通ならば友人たちが来て救急車を呼んでくれます。そこで介抱される。ところが竹内先生も服部先生もその人の傍らを通っても、その人が穢れたもののように遠く離れて行っちゃう。ここの学長さんも行っちゃって。そうすると今まで麗澤大学を我がプライドとして、この大学と自分は一体であるという光榮にみちたアイデンティティを持って働いて働いていたが、急速にそのアイデンティ

ティもプライドも失くしていく。だからそういう意味でこのユダヤ人は、ユダヤ教徒のアイデンティティを失って、ただのユダヤ人、赤裸々な人間になったわけですよ。

サマリア人も、ロバを引っ張ってきて敵地であるエルサレムあたりをうろうろしているわけで、この人もサマリア教という枠組みをおそらくもう既に脱けた人であると考えられます。たぶん商人か何かかもしれないです。ですから、彼はそのサマリア教という枠組みを出て、つまり民族的同一性、宗教的同一性だとか、色んな同一性の外に自由に生きている。その同一性というのは他の人々に対しては垣根になるわけです。半殺しになったユダヤ教徒も、ユダヤ教の同一性のシンボルから棄てられてその民族的宗教的同一性だとか、色んな同一性から剥がれちゃって、裸の人間となっていた。だからそういう意味でこの善きサマリア人の譬えというのは解釈としては博愛主義の、つまり健康なサマリア人が傷ついた人を救うという、そういう高い目線から見るというこれまでの博愛主義的な解釈とは違うのではないかな、と思う。要

するに、この譬えは自分の色んな垣根を越えていく。つまり実体化されて固定化された世界から、超えていった、それも意識的にというよりも、偶然か、何かの形で超えさせられたという、そういう人々の、裸の人間の、出会いの物語として解釈されうると思います。

翻って現代世界でも人間社会を見ますと、みんな自分の同一性を持っていて、それを外れた人々を排除する。大はI・Sと西欧的な文明の対立、経済的対立、小は職場は職場なりに、家庭は家庭なりに対立を秘めている。あるいは生物体としての私たち人類は、強固な実体的な同一性に拠って知らず知らず他の生物種を滅ぼしていく。他方で勿論オープンな同一性っていうのはあつて、例えばイエスの譬えみたいな物語的同一性です。他者にオープンな同一性を持つっていうことは非常に大切だと思うので、そういう意味で、現代社会の実体化された同一性を打ち破っていくために、それを超えるような物語のオープンな、同一的な協働を押し広げていく。だから他者の色んな譬え話や、あるいは他者の物語に注目

したい。例えば沖縄なら沖縄の物語があるでしょうし、アイヌならアイヌの秘められた物語があるでしょうし、虐げられた色んな女性の物語もあります。私なんかはフェミニズムの物語で非常に感心するのは、ヨーロッパのフェミニズムじゃなくて日本の女性の中で、出口なおだとか、あるいは天理教の中山みきの御筆先なんかです。ああいう物語。あれはすごい他者の地平への突破力を持っていると思うのです。御筆先は貧しく蔑視され出産に命をかける女性たちを集集する。そういう他者の物語を集めていって、それを現代の固まった、実体的な世界におつつけていく。それは、生命の自発と智慧の営みです。そういう物語こそが現代の全体主義的な文明の文脈に異化作用を働かせていく。そういう意味で、このイエスの譬え話には非常に身にしみる異化作用があると思います。

イエスというのはそういう譬え話によって、自己中心的な人々の同一性を、つまりこの三角形の、聖なる世界をぶっ壊していったのです。そしてこの排斥された人々とともに、ある共同体を形成していった。そ

ういう共同体、相生の世界を作っていく。それがイエスの相生の運動であり、聖書の中では神の国運動って言われているものはそういう異化的にして相生創造的な動態なのです。その背景には、イエスが「父」と呼ぶ神ヤハウエの相生に向けての脱自的エヒエ（一人称単純未完了形）が働いているわけですね^注。今日はこの重要な点に立ち入れませんが、さしあたり私たちは、譬えが秘める自・他の地平への突破力を自覚し、この「善きサマリヤ人」の譬えを色んなところで様々な仕方私たちが自身に当てはめて考えることが出来るのではないかと思います。御清聴有難うございました。

（注一）この点について、宮本久雄編著「ハヤトロギアとエヒエロギア―「アウシユヰイツ」「FUKUSHIMA」以後の思想の可能性」教友社、二〇一五年を参照されたし。

（編集者注）本稿は、平成二十九年三月七日に開催したモラロジー研究所道徳科学研究センター主催の「特別研究会」の内容を取録したものである。

